

## 佐賀県果樹試験場の取り組み 病害虫研究担当編

佐賀県果樹試験場 専門研究員 口木文孝

果樹を栽培していると、必ず病害虫が発生します。病害虫の発生が少なく、実害がなければ我慢もできますが、多発生して被害が大きくなったら大変です。病害虫研究担当では、果樹が病害虫による被害を受けないようにする技術の確立などの研究を行っていますので紹介します。

### 病害虫研究担当の取り組み

#### 病害虫の発生生態の解明

病害虫による被害を防ぐためには、まず各病害虫がどのような条件で多発生して被害を与えるのかを明らかにする必要があります。そのために、病害虫の発生状況を調査するとともに、病原菌の培養及び害虫の飼育を行うことによって生態解明を行っています。

最近、県内の果樹ではナシのチュウゴクナシキジラミやキウイフルーツのキクビスカシバのような新発生病害虫が多く、これらの新発生病害虫の発生生態を早急に解明して防除時期等を明らかにしています。

なお、予察灯（果樹カメムシ類）、フェロモントラップ（ナシヒメシンクイガ及び果樹カメムシ類）及び黄色粘着トラップ（チャノキイロアザミウマ等）を用いた害虫の成虫の発生消長調査などを実施しています。これらの病害虫の調査データは、佐賀県農業技術防除センターに提供して病害虫発生予察情報の根拠として用いられています。

#### 効率的な病害虫防除技術の確立

現在、カンキツの果実腐敗の原因となる病原菌、ミカンハダニやフジコナカイガラムシなどの病害虫について薬剤感受性検定を実施して、より効果の高い農薬を選抜しています。併せて、果樹園において散布試験を実施し、より防除効果の高い薬剤の選抜を行っています。

また、発生が長期間に及ぶ病害虫などでは、農薬を1回散布しただけでは十分な防除効果が得られないため、定期的に農薬を散布する必要があります。そこで、カンキツの黒点病に対して、簡易雨量計をほ場に設置してその地点の降水量から次の防除時期を把握する技術を確立しましたが、現在、他の病害への応用を目指した試験を実施しているところです。

#### 新農薬の効果判定及び佐賀県での適合性の検討

農薬メーカーが開発する新しい薬剤について、その効果判定や薬害の発生の有無について試験を行っています。カンキツ、ナシ及びブドウの病害虫を中心に、新農薬の効果判定及び農薬の適用拡大試験を、年間約30～40剤について実施しています。今年も、カンキツ灰色かび病、そうか病及びミカンサビダニ、ナシ黒星病及びチュウゴクナシキジラミなどに対する薬剤の試験を実施しています。

なお、新規登録及び適用拡大された農薬については、佐賀県での最も効果の高い散布時期、散布回数及び散布間隔などを検討するための試験も併せて実施しています。今年も、カンキツのカイガラムシ類及びミカンサビダニ、キウイフルーツのすす斑病などの佐賀県での使用方法等について試験を実施しています。

また、これらの試験で良好な成績を示した農薬について、県内各地の技術者（指導者）連絡協議会が展示圃で実用化を検討したのち、佐賀県病害虫防除のてびきに記載し、各地区で作成される防除暦（作業暦）などに採択して農家の方に使用していただいています。

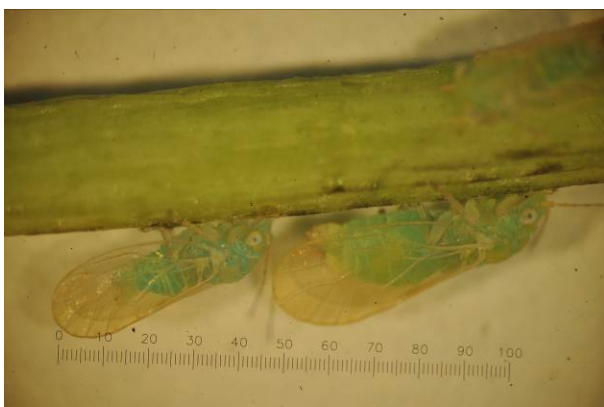


写真1 ナシを加害するチュウゴクナシキジラミの成虫



写真2 キウイフルーツを加害するキクビスカシバの成虫



写真3 温州ミカンの果実腐敗の薬剤検定

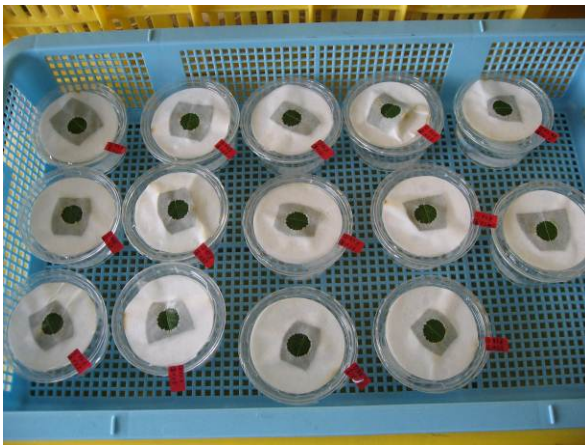


写真4 カンキツのミカンハダニの薬剤検定



写真5 簡易雨量計



写真6 ナシ黒星病



写真7 キウイフルーツすす斑病